

中世の記録語彙散策―「莫言」「有若亡」「物騒」―

中山 緑 朗

一

鎌倉時代を代表する古記録である『民経記』^(注1)は、自筆原本が多量に伝存する貴重な日記として知られている。語彙もきわめて豊富であり、記録語の研究には不可欠の資料と言えよう。本稿では、これまでに気になっている幾つかの記録語を取り上げ、平安時代と室町時代の古記録を随時参照しながら、意味や用法を検討しつつ、記録語の変遷について論じてみたい。

今回の論考をまとめるについては、筆者はかつて『民経記』について論考を発表しているが^(注2)、その際に蒐集した用例の他に、東京大学史料編纂所がインターネット上で公開している「古記録フルテキストデータベース」^(注3)を参照し、他に必要に応じて「古文書フルテキストデータベース」「平安遺文フルテキストデータベース」「鎌倉遺文フルテキストデータベース」を併せて参照している。

二

【莫言】コトバナシ・バクゲン

かつて斎木一馬氏が『日本国語大辞典』^(注4)に採録すべき記録語として11語を挙げているが、そのうち「縁底エンテイ」「帰華キヒツ・帰蓬キホウ」「御報ゴホウ」「自焼ジヤキ」「且千シヨセン」「出物シュツモツ」「衝黒シヨウコク」「蓬華ホウヒツ」は『日本国語』の新版では採録されている。「自剋ジコク」は「データベース」では見当たらない語句である。「孟光モウコウ」は『角川古語大辞典』^(注5)には採録されている。残る一語がここで取り上げる「莫言」である。

「莫言」の用例は平安時代後期の『中右記』^(注6)に二例見ることができる。

聴昇殿世人有不甘心之気歟、但莫言、(承德二年十月廿三日)

於有院勅勘者、不可論左右、世間莫言、(康和四年十月十七日)

ここでの意味は文字通り、感心できない事柄について世間の人々の間で口にすべき「言葉がない・風評がない」と解することができる。

鎌倉時代の用例では、意味・用法に違いが生まれているように思われる。『岡屋関白記』^(注7)では二例を見る。

被進之、他事只以之可察也、莫言莫言、(建長二年六月六日)

他人事無益無益、莫言莫言、(建長三年八月十四日)

『猪隈関白記』^(注8)では次の一例を見るが、

但時之権臣事不能是非歟、莫言莫言、(安貞二年九月九日)

とあって、これらは事の成り行きや状況について「驚き、呆れて口に出すべき言葉がない」という意味で使用され、その批判的立場を強調するために二度続けて用いられている。平安時代の用例が、より客観的な状況に用いられているのに比べると、事柄に対して主観的な感情を表現している。

『民経記』では「データベース」で見ると、用例は二十例ほど見る。このうち十九例が「莫言莫言」の繰り返しで、いわばほとんどが「驚き・呆れた」などの感情の強調表現である。

諸堂同時化灰燼定未曾有之珍事歟、莫言莫言、(文永元年三月廿四日)

後日衆口傲々云々、莫言、(文永四年八月十五日)

ここの前者の例は、一度に寺院の多くの建築物が焼失し、驚き（悲しみも含むか）で「口に出すべき言葉がない」状態に使用されている。

後者は歌会の出題に関しての批判が多くの人からあり、その状況について自分としては「何も言うべきことがない」ことを表現するが、この場合は暗に批判的な含みがあると思われる。

室町時代の記録でも多用され、『建内記』^(注9)では十四例を数える。そのうち「莫言莫言」と繰り返されるのは九例を数える。

更不知政道要之所致也、可云末代、莫言莫言、(永享十一年六月廿二日)

『薩戒記』^(注10)では三例を見、

左道之聞之由、此兩人尤為奇、莫言莫言、(正長元年十月十一日)

とあって、いずれの例も「呆れて言葉がない」意であろう。

近世に近い『実隆公記』(三条西実隆)にも頻出しており、

飛鳥井同罷向歟、可彈指々々々、莫言々々、(永正三年五月十九日)

尽為臣之道而已、每事莫言々々、(享祿三年九月十四日)

などの例を見る。

このように「莫言」は斎木一馬氏が指摘する^(注11)ように、各時代の古記録に使用される、いわば典型的ともいえる記録語であるが、大型国語辞典の採録するところとなっていない。大型国語辞典に採録されていない大きな理由としては、代表的な古辞書に採録されていないということが挙げられる。管見の及ぶ範囲内で見ると、『色葉字類抄』や中世の古辞書

類、「古本節用集」などについては写真複製・語彙索引がかなり整備されているが、これまでのところ「莫言」は未見である。

さらに前述したように古辞書に採録されていないことにも関係するが、表記の上では「莫言」は慣用的な固定した語形ではあるが、記録者に語句としての認識があったかどうかである。このことについては古辞書に項目として採録されておらず、語釈の文脈等での記述も未見であり、当代の人々が「莫言」をどう認識していたか、現在のところ手掛かりがない。

では「莫言」について、手掛かりが全くないとすれば、どのような角度から入り込む隙間があるだろうか。

『大漢和』^(注12)などの漢和辞典にも「莫言」は見当たらない。大型の国語辞典、古語辞典ではどうであろうか。

『日本国語』では、親見出し「ことば【言葉・詞・辞】」の項目に、「ことばなし」の子見出しがあり、次のような語釈と用例が掲げられている。

- ①言うべきことばがない。弁解することができないさまや悲歎にくれてしゃべること
もできないさまにいう。*徒然草（1331頃）三六「久しくおとづれぬ比（ころ）、い
かばかり恨むらんと、我が怠り思ひ知られて言葉なき心地するに」*幸若・信太（室
町末一近世初）「信太殿聞し召されて、うらむる所存はなけれども、涙にくれてこと
葉なし」*仮名草子・伊曾保物語（1639頃）下・十一「狼（おほかめ）此由を見て<
略>野牛を召し籠め汝なにのゆへにわれを追ふぞといひければ、野牛ことばなふして」
*歌舞伎・一心二河白道（1698）一「文を入れて置きました、それがないと逢うた時
詞がない」②誰もが押し黙っているさまをいう。「寂（せき）としてことばもない」

古記録では「莫言」は文末で、独立語のように使われているが、これらの用例は連用修飾語として使われ、文の中での位置が異なっているので、同じ用法と見ることはできない。

『角川古語』では、やはり親見出し「ことば」の項目で、「ことば無し」の子見出しがあり、次のように解説されている。

言うべきことばがない。返答につまる。「ことのはなし」ともいう。「久しくおとづれ
ぬ比、いかばかりうらむらぬ比、いかばかりうらむらんと、我が怠り思ひ知られてこ
とのはなき心地するに」（常縁本徒然・三六）「われら横ありき候か、母上のあるかせ
給ふは、縦ありきか、そばありきかと笑ひければ、ことばなふてぞゐたりける」（伊
曾保・下）

この語句について、『時代別国語辞典（室町時代編）』（三省堂）では、やはり親見出し「ことば」の項目に、子見出し「言葉無し」があり、次のように解説されている

- ①その場の雰囲気によって圧倒されて、言うべきことばを失い、茫然自失のていである。
「子路拱而立、子路辞ナウシテ、ウカト立テ居タリ」（応永本論語抄微子）「憑ミ思タ

ル重恩ノ郎従モ皆落失ヌト聞ヘケレバ、早言（平仮名本「ことは」）モナク興醒、茫然トシタル気色也」（太平記三五、京勢重南方発向事）②悲歎の余りに泣くばかりで、ことばにならないさまである。「信田殿聞召れて、うらむる所存はなけれ共、泪にくれて言葉なし」（文禄本幸若＝信太）「ありける事、くわしくたづねといへども、そののちは、なきしづみたるばかりにて、さらにことはもなかりけり」（短編＝松姫物語）

以上の用例を見ると、鎌倉時代とそれ以前の用例は見当たらない。しかし、『日本国語』では『土佐日記』に「言う甲斐無し」、『宇津保物語』に「言う限り無し」、『蜻蛉日記』に「言う方無し」という語句があることを教えている。

『御堂関白記』では、次のような例があり^(注13)、

無云益、（長和元年一月十六日）

これは『色葉字類抄』では「益」に「甲斐」と読みを与えている^(注14)ので、「いふかひなし」と訓むことができ、和文との共通性がある。「無」は中国語としては動詞であり、形容詞として使用されるのは訓読語法であろう。平安時代の和文に「ことばなし」は未見であるが、「いふかひなし」には「ことばなし」に共通するところがあり、古記録では「莫言」の形が定着していたものであろう。古辞書などの記載が未見なので、字音で「バクゲン」と読んだものか、訓読して「コトバナシ」読んだものか、現時点では明らかにできないが、「莫言」がとくに鎌倉時代以降の古記録では常用の語句であったことは認めていいと思われる。

【有若亡】イウジャクバウ

「有若亡」は斎木一馬氏の論考^(注15)などで広く知られるようになった典型的な記録語である。『日本国語』では、意味として、

あるべき状態にないこと。存在する意味を持たないこと。必要な資格・能力を欠くこと。転じて、非礼であること。無能であること。

のように説明されている。

『小右記』の例として「昨日辰剋許入滅、申剋許蘇生、其後有若亡云々（寛弘五年七月七日）」が掲げられ、『玉葉』の例として「幼年之者、不候大事定、〈略〉他人有若亡之輩、多参入或懇望云々、是見苦事也（文治二年七月廿一日）」が掲げられ、前者は「有るべき状態にないこと」、後者は「必要な能力を欠くこと」の意であろう。

『民経記』では十八例ある。

関白殿腹立給、有親朝臣散々突鼻、何有若亡居其職乎之由被誠仰下云々、（貞永元年二月廿九日）

雖為執柄争咎申哉、返々有若亡之由被仰、此事世間謳歌云々、（仁治三年八月五日）前者は「無能な者」、後者は「非礼。失礼」の意であろう。中世には『日本国語』でいうところの「転じて」の意「非礼。無能」になっていたようである。室町時代の『建内記』

では二例見え、

被御加扶持、時房未練有若亡、被優父祖之奉公、(正長元年五月三十日)

棄毀文書者有制事也、有若亡之所致歟、(文安四年四月二十日)

とあって、前者は「未練＝未熟」と並んで用いられているので「無能」の意で、後者は「非礼」の意であろう。

『薩戒記』での用例は五例を見るが、

当時職事作法毎事如此、有若亡也、神慮難測歟、(応永三十二年十一月一日)

彼卿所命有若亡由、頻被難之、(正長元年四月廿六日)

などの用例を見ると、五例はすべて「非礼。失礼」の意で用いられている。

平安時代の記録では、病気で抜け殻のようになった状態を「有若亡」で表しているが、中世以降はそうした文字通りの意味は薄くなり、「存在感がない」意から次第に「無能力。非礼」といった意味に移り変わっていったようである。

【物騒】 ブッソウ

この語句については佐藤喜代治氏が詳細に考証されている(『日本の漢語』「ぶつー」角川書店 昭和54年 339～344頁)。そこでは次のような指摘がある。

ここにあげた例に見るように「物騒」と書くこともあるが、「物惣」と書く場合ははるかに多く、これを音読して「ぶっそう」と言ったものと考えられる。「物騒」は音読すれば「ぶつさう」となり、「惣^{そう}」はいわゆる合音、「騒^{さう}」は開音で、古くは混同することが無かった。『音曲玉淵集』でブッソウとしているのは、「物惣」の字に基づいた発音である。近世になって、開合の区別が失われ、「惣」(「忽」と同字)は「騒」に比べて一般的でないということもあって、「物騒」と書くことが多くなったのではないと思われる。

平安時代は字音から見れば「騒」が開音、「忽(惣)」が合音であり、意味的にも『色葉字類抄』では「騒サワク」「惣イソク」とあり、『類聚名義抄』でも「騒サワク」「惣イソガハシ」と和訓が付されており、この「物騒」「物忽」という二つの語句が混同されることはまずなかったと見てよいという説である。

但し、「物騒」はきわめて用例が少なく、記録類では『中右記』に三例、近世の『土井覚兼日記』に一例見るのみである。

「物忽」は『民経記』では四十六例、『建内記』では七十五例を数えるいわば記録における常用語である。この語句に「危険だ」という意味があるが、平安時代の、『朝野群載 卷22』に、

道路之間、取物害人、如比物忽、日夜不絶、(天曆四年二月二十日)

とあって、比較的早い時期に「忙しい」の意味とは異なる用法が派生していることを教えている。

これを平安時代の『中右記』で見ると、

主上俄御風令発御、禁中甚物騒者、乍驚先参殿下、(嘉承元年一月十九日)

南庭有闘諍事、禁中頗以物騒、被尋問事元之处、(寛治五年十一月二十日)

などの例があり、前者は「慌ただしい。落ち着かない」意であり、後者は「危ない様子」の意であろう。

こうした意味・用法は鎌倉時代の『民経記』を見ると、「物忽」にも継承されていると見ることができるのであって、次のような例を見る。

又南方有焼亡云々、雲暗風荒、毎時物忽也、(寛喜三年二月廿八日)

北政所御産気火急、御祈已下事物忽、巷之間軒騎競馳、(寛喜三年五月二十日)

前者は「危険だ」の意で、後者は「慌ただしい」の意である。この時代には「物騒」と「物忽」とがすでに混同して用いられていた可能性が考えられる。というよりも「物騒」の意味領域を「物忽」が浸食していたと見ることができよう。

室町時代の『建内記』になると、「慌ただしい」意ではあまり用いられなくなり、もっぱら「危険だ」の意で使われている。

室町殿警固武士、夜々物忽・喧嘩等珍事也、(嘉吉元年六月二十九日)

世間物忽、山川切腹由有其説、(嘉吉三年二月廿八日)

戦乱に明け暮れる社会状況に突入していた時代であるから、不穏な社会情勢を描写する言葉としては適切な語句であったのかもしれない。

ところで「物忽」が姿を消し、それまであまり頻度数の低い「物騒」が使われ出したのはいかなる理由があったのであろうか。佐藤喜代治氏は前掲書でこの事情に言及し、前掲したような説を述べておられる。「開合」の区別が失われた近世に入ってから、この二つの語句が混同されたという指摘である。

但し、この「開合」については、「鎌倉時代の、とくに非上流知識層の人々の仮名文書の原本(写真等)には三十例近い開合混乱表記例」が確認されているという指摘^(注16)もあり、「開合」の区別を絶対視する視点だけでは説明が十分でないとも考えられる。

中世末期とも言える『土井覚兼日記』には、

彼寺に滞留候て、当時京都辺物騒候間、左様之儀等開合被成候、(天正十年十二月十二日)

とあって「危険」の意で使用されている。

前掲した似た意味用法の『中右記』と『土井覚兼日記』との間には五百年近い時間的な隔りがある。この間、「物騒」は古文書などに数例を見るだけで、古記録類では「データベース」で見るとほとんど用例を見ない。もとより現在公開されている「データベース」には『小右記』などの古記録語彙の宝庫とも言うべき資料が未掲載であり、完璧とは言い難いが、そのことを割り引いて考えると、現時点の「データベース」での状況

では中世での「物騒」はほとんどその用例を見ず、「物忽」が頻出する。この点について、ここでは次のように考えておきたい。

「物騒」は「モノサワガシ」、「物忽」は「モノイソガハシ」に漢字を宛てた和製漢語であるが、前者は「ブツサウ」であり、後者は「ブツソウ」であって、明瞭な区別が知識層にはあったと思われる。しかしながら、日常語に近い形で民衆にも使用されることがあったとすれば、この相違をどれだけ保ち得たであろうか。

また前述したように、「物忽」がすでに平安時代に「物騒」の意味を浸食している傾向が窺えるのである。とすれば、中世には「物忽」が「物騒」を押しつけて勢力を浸透させていたものの、近世に入って急速に「物騒」と入れ替わりがあったのは、知識層における「開合」の区別の維持という視点とは別に、民衆レベルにおける「物騒」と「物忽」の混同が知識層に上昇し、やがて「忽」よりも馴染みのある「騒」と表記されることが一般的になっていったものであろう。

注

- (1)藤原経光（建暦二年〈1212〉～文永十一年〈1274〉）の日記。
 - (2)『民経記』とその使用語彙（拙著『平安・鎌倉時代古記録の語彙』所収 東宛社 平成7年）
 - (3)東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」（平成22年11月10日～12月5日にかけて入手）など。
 - (4)『日本国語大辞典』（新版）小学館 平成12～14年、以下『日本国語』と略称。
 - (5)『角川古語大辞典』角川書店 昭和57年～平成11年、以下『角川古語』と略称。
 - (6)藤原宗忠（康平五年〈1062〉～永治元年〈1141〉）の日記。
 - (7)近衛兼経（承元四年〈1210〉～正元元年〈1259〉）の日記。
 - (8)藤原（近衛）家実（治承三年〈1179〉～仁治三年〈1241〉）の日記。
 - (9)万里小路時房（応永元年〈1394〉～長祿元年〈1457〉）の日記。
 - (10)中山（藤原）定親（応永八年〈1401〉～長祿三年〈1459〉）の日記。
 - (11)斎木一馬「記録語と国語辞書」『國學院雑誌』第80巻11号 昭和54年11月
 - (12)諸橋轍治次『大漢和辞典』修訂版 大修館書店 昭和59年4月～昭和61年4月
 - (13)峰岸明編『陽明文庫蔵本御堂関白記自筆本総索引（二）』汲古書院 平成7年7月
 - (14)中田祝夫・峰岸明編『色葉字類抄研究並びに総合索引』風間書房 昭和52年8月
 - (15)斎木一馬「国語史料としての古記録の研究―記録語の例解―」『國學院雑誌』第55巻2号 昭和29年6月
 - (16)辛島美絵「仮名文書」（飛田良文他『日本語学研究事典』明治書院 平成19年1月）
- ※各古記録の用例は東京大学史料編纂所編「大日本古記録」の本文で検証し、『実隆公記』は高橋隆三編『実隆公記』（続群書類従完成会 昭和33年～昭和42年）によった。